

札幌農学校初期における農業経済学の形成過程に 関する研究

I. 佐藤昌介・新渡戸稲造のアメリカ留学時代の履修記録

和泉庫四郎*

昭和57年7月31日受付

A Study of the Development Process of Agricultural Economics During the Early Days of the Sapporo Agricultural College (I)

Kurashiro Izumi

Three Professors played extremely important roles in developing Japan's agricultural economics in the middle of the Meiji era. Two of them were Shosuke Sato and Inazo Nitobe at the Sapporo Agricultural College, and the other was Tokiyoshi Yokoi of the Komaba Agricultural College, Tokyo.

This paper mainly deals with Sato and Nitobe. After they graduated from Sapporo, both of them went to the United States, and spent three years doing graduate studies at the Johns Hopkins University. Throughout the 1880's Johns Hopkins was one of the most distinguished institutions in the United States, consisting of the Departments of Mathematics and Natural Science, Languages, History and Political Science, and Philosophy. Sato and Nitobe were in the Department of History and Political Science. Their class work has been examined using the Johns Hopkins University Circulars, Nos. 27 to 56, which were issued from 1883 to 1887. There were no courses in farm economics and agricultural policy, but their studies at this institution were very helpful in enabling them to grow into famous social scientists.

問題の所在

本稿の目的は、わが国の農業経済学の形成期に指導的役割を果たした佐藤昌介(1865~1939)と新渡戸稲造(1862~1933)のアメリカ留学時代の学習状況を明らかにし、かれらの農業経済学の学問的性格を追突する手掛かりに役立てることである。

箕作佳吉(1857~1909)、久原躬弦(1855~1919)、上

記の佐藤昌介と新渡戸稲造、元良勇次郎(1858~1912)、家永豊吉(1863~1936)など、明治中期から大正にかけて、それぞれの専門分野において、わが国の大学教育の発展に大きな足跡を残した学者が、1880年代に、ジョンズ・ホプキンス大学に留学したことは、周知のとおりである。

これら明治の俊英たちが留学したジョンズ・ホプキンス大学は、大学の所在地アメリカはメリーランド州、ボル

* 鳥取大学農学部農業経営学科農業経営学研究室

Department of Farm Economics, Faculty of Agriculture, Tottori University

ティモアで産をなした同名の実業家の、700万ドルという当時としては文字通り膨大な遺贈金を、病院の建設と折半して1872年に設立された、「アメリカで最初の真の大学院大学」(Encyclopedia Americana. 1980 ed., Vol.14)であった。巨額な資金をもち、創設準備に四年の歳月を費やしただけあって、1876年9月にこの大学が開校したときには、アメリカ全土から集った秀才が、競って入学を希望したといわれている。そして、優秀な教授陣と学長ダニエル・C・ギルマンの優れた経営手腕とによって大学の名声は年ごとに高まり、前記の日本人留学生が学んでいた1880年代の十年間は、ジョンズ・ホプキンス大学にとっての、文字通りの黄金時代に相当する時期であった。

ところで、ジョンズ・ホプキンス大学の大学院で学生生活を送ったこれらの学者のなかで、新渡戸(当時は太田)だけが、この大学からPh. D. の学位を取得していない。どうしたことであろうか。

新渡戸のこの大学の在学期間は、1884年10月から1887年の5月までの三ヵ年であったから、期間的には歴史・政治学科で学んだ佐藤昌介や家永豊吉と同じであり、別に短すぎるということにはなかった。札幌農学校在学時代から抜群の英語力をもち、「太平洋の橋になる」との<大志>を抱いて渡航、しかもジョンズ・ホプキンス大学の学問的ふん囲気をこよなく愛していたかれが、この大学からドクターの学位を取得せずに、農政学の研究のため、ボルティモアから直接ドイツへ旅立ったのは、当時帰国して札幌農学校の教壇に立っていた、佐藤昌介の説明を待つまでもなく、²³⁾ ジョンズ・ホプキンス大学留学中たえずかれを悩ましていた、学費問題のなせる業であった。ドイツ留学は、学者としての新渡戸の大成に重要な役割を果すのであるが、米独留学から帰国後のかれの人生を検討すると、ドイツ留学よりも、ジョンズ・ホプキンス大学滞在中の学習が、かれの言動により鮮明ににじみでているから、本稿では新渡戸の学習を、先輩佐藤昌介のそれと比較しながら、専らジョンズ・ホプキンス大学留学時代に限定して検討していくことにする。

松隈俊子『新渡戸稲造』(みすず書房、初版1969年、再版1982年)は数ある<新渡戸研究書>のなかでも最も優れた成果の一つであるが、新渡戸のジョンズ・ホプキンス大学時代の学習を次のように説明している。「この大学で学ぶこと3年、研究した学科は経済学、農政学、農業経済、行政、国際法、歴史学、英文学、ドイツ語等であった」¹⁴⁾と。

松隈の以上の説明は出典を明らかにしていないから、真偽のほどを確かめることは困難であるが、新渡戸がジ

ョンズ・ホプキンスで「農政学や農業経済」を学んだとする説は、新渡戸自身が、この大学に留学していた1885年前後の状況について、次のように述べているのと矛盾することになる。「(アメリカ留学中に一引用者)農政学或は農業経済を調べる積りであったが、30年前は英米では政府が直接農業に関係することはなかった。従って農政に当る文字さえもなかった」(新渡戸稲造「学生時代のウイルソン」『中央公論』1917年3月号収録)。

新渡戸が留学していた時期のアメリカで農政学という学問が存在していなかったとするならば、かれより一年早くジョンズ・ホプキンスに入学していた佐藤昌介も、新渡戸と同じようにこの大学で農政学や農業経済を学ばなかったことになるから、佐藤がこの大学で「アダムス博士から農政学を、イリー博士から農業経済を学んだ」(中島九郎『佐藤昌介』川崎書店1956年)とか、さらに話しの輪を広げて「ホプキンス大学で一連の農業技術の理論づけを身につけた」¹⁰⁾という佐藤・新渡戸のアメリカ留学時代の学習にまつわる説明は、かれらの学習をジョンズ・ホプキンス大学の学習について見る限り、二人が教壇に立っていた札幌農学校で、学生たちの願望を込めていつの間にか作られた〈うわさ話〉であり、あたかも事実であったかのように語り継がれてきた〈神話〉に基づくものであった。

アメリカで農業経済学が大学で講義されるのは、ヘンリー・C・テラーが書誌学的な研究書『アメリカ合衆国における農業経済学の歴史、1840～1932年』(Henry C. and Anne Dewees Tylor: "The Story of Agricultural Economics in the United States, 1840～1932")において詳細に紹介しているように、佐藤と新渡戸のジョンズ・ホプキンス大学留学の時期よりも約二十年遅い1905年、とくに1910年以降のことに属する。そして、こうしたテラーの紹介を裏付けるかのように、1904年(明治37年)に佐藤・新渡戸の札幌農学校での高弟高岡熊雄は、ドイツでの三ヵ年の農政学研究を終え、米国経由で帰国した際に、アメリカ農業経済学から受けた印象を、次のように説明している。「ドイツ留学からの帰途セントルイスで開催中の世界大博覧会を視察した時、教育館に物珍しそうに大学教授の農業経済学講義の大要が二、三陳列してあったのを見て驚いた。……この事実は、当時アメリカでの農業経済研究がまだきわめて幼稚であったことを証明する」²⁶⁾

ジョンズ・ホプキンス大学を含めて佐藤・新渡戸が留学していた頃のアメリカにおいて、農業経済学が全くといってよいほど未発達な状態であったにもかかわらず、これら二人の学者がジョンズ・ホプキンスにおいて農政

学と農業経済学を学んだとする説が一般化したのは、さきにも簡単に触れたごとく、かれら二人が帰国後札幌農学校教授に任ぜられ、それぞれ農業経済学と農政学を担当したことにまつわって生じた憶測に過ぎなかった。

『北大百年の百年』（北海タイムス社、1976年）のなかで佐藤昌介が「ホプキンス大学で一連の農学技術の理論づけを身につけた」として、ジョンズ・ホプキンス大学をあたかも農科大学であったかのように取り扱う見解も、これとほぼ同じ種類の神話に根ざしていたと考えても、差し支えないであろう。

それでは、新渡戸と佐藤が留学した時期のジョンズ・ホプキンス大学とは、一体、どのような大学であったのであろうか。

ヒュー・ホーキンス『パイオーニア：ジョンズ・ホプキンス大学の歴史、1874～1889年』（コーネル大学出版会、1960年）によれば、1880年代のジョンズ・ホプキンス大学は理学系（数学、物理学、化学、生物学）、語学系（ギリシャ・ラテン語、ロマンス語系言語、ドイツ語、フランス語、英語）、歴史・政治学系、哲学系から構成されていた文理科大学であった。⁶⁾ 佐藤は1883年9月から1886年6月まで、新渡戸は1884年10月から1887年5月までの三ヵ年を、それぞれこの大学の歴史・政治学科の大学院で留学生を送ったのであるが、本稿ではこの間にかれらが履修した科目を学期ごとに明らかにし、アメリカ留学時代の学習が、二人の農業経済学ないしは農政学の性格形成に、どのような影響を与えたかを知るための手掛かりを掴むことから始めてみることにする。

履修の実態

ところで、こうした形で佐藤昌介と新渡戸稲造の学問形成にアプローチしようと試みる場合にとりあえず問題になるのは、かれら二人のジョンズ・ホプキンス大学留学時代の履修状況をどのような方法で知ることができるか、ということであろう。かれらのアメリカ留学は百年前の出来事であったから、ちょっと考えると、大変な作業を必要とするように思われるが、幸いなことに、当時の『学報』—正確には『ジョンズ・ホプキンス大学サーキュラーズ』（Johns Hopkins University Circulars）を目的に添って整理することで、比較的容易に、可能となった。

すなわち、1885年前後の『ジョンズ・ホプキンス大学サーキュラーズ』（以下、単に『学報』）は、佐藤と新渡戸が留学していた時期のこの大学における教員構成、開講されていた講義・演習の種類と内容などを知る上にまたとない資料として役立つのみならず、年二回の学期末

には特別号を編集。大学院学生の名前、住所、出身学校、専攻登録に加えて、開講された講義・演習ごとに履修した大学院学生名を付記して発行されていた。

新渡戸（当時は太田）は1884年（明治17年）9月1日に横浜からサンパブロ号に乗船して渡米、翌10月には先輩佐藤昌介が一年前から在学していたこの大学の歴史・政治学科の大学院に入学したことは、すでに広く知られているとおりである。

さて、この年の12月に発行された『学報』第34号には、佐藤の大学院での専攻登録は、他の大部分の歴史・政治学科の大学院学生がそうであったごとく、＜歴史・政治学（History and Political Science）＞、新渡戸の登録は＜歴史（History）＞となっている。佐藤の専攻が＜歴史・政治学＞であるのに対して、新渡戸の専攻がどうして＜歴史＞となった明らかにすることも、それ自体、興味ある問題であるが、ここではさきに引用した「学生時代のウイルソン」のなかで新渡戸自身が次のように述べていることを、理由として挙げておくにとどめる。「農政或は農業経済を調べる積りであった…が、其便利は甚だ備って居なかった。世人も知る通り英米では30年前は政府が直接農業に関係する事はなかった。従って農政に当る文字さへもなかった。故に指導教師の切な勧告によって日米関係系なるものを調べた。

佐藤の専攻が＜歴史・政治学＞であったのに対して新渡戸の専攻は＜歴史＞であったけれども、二人がこの大学で履修した科目にはそれほど顕著な相違は見られなかった。」

二人の履修した科目を、佐藤については『学報』第27号（1883年11月刊）、29号（1884年3月刊）、34号（1884年11月刊）、38号（1885年3月刊）、44号（1885年11月刊）、47号（1886年3月刊）によって、新渡戸については佐藤と重複する『学報』第34、38、44、47号に加えて第52号（1886年11月刊）と56号（1887年3月刊）を用いて集計すると、次のようになる。

佐藤昌介の履修科目：歴史・政治学ゼミナール、政治史、アメリカ史、国際法、国家論、経済学、上級経済学、貨幣・金融・銀行・商業論、租税（都市）行政論、教育学、弁論（朗読）法、ドイツ語（講読Ⅰ、Ⅱ、作文、会話）、フランス語会話

新渡戸稲造の履修科目：歴史・政治学ゼミナール、政治史、国際法、ゲルマン制度論、教会史、ルネッサンス論、歴史批判論、上級経済学、経済学説史、貨幣・金融・銀行・商業論、租税（都市）行政論、弁論（朗読法）、ドイツ語（講読Ⅰ、Ⅱ、作文）

二人の履修したこれらの科目を担当教師名、実施曜日、時間などを併記して学期別に示すと下の表のようになるが、これらの集計・整理された科目のなかには、後で触れるドイツのフライバーク大学教授フォン・ホルスト (H. Von Holst, Prof. of the Univ. of Freiburg) など、豊富な基金をもつジョンズ・ホプキンス大学がヨーロッパの一流学者を招へいして実施していた集中講義の履修が含まれていないことを指摘しておく。^{注)}

集計・整理された佐藤と新渡戸の履修科目を比較する

と、二人の専攻登録がそれぞれ<歴史・政治学>と<歴史>であったことから想像されるような大きな開きは見られない。強いて相違を指摘するとすれば、佐藤が「国家論」、「教育学」などを履修していたのに対して、新渡戸は「教会史」、「ルネッサンス論」など、文化的な色彩の強い科目を履修していることであろうか。

二人の履修した科目の相違はこうした歴史、政治学、経済学に係わる専門科目ではなく、外国語関係において顕著に現れている。佐藤はドイツ語とフランス語の会話

ジョンズ・ホプキンス大学大学院における佐藤昌介と新渡戸稻造の学期別・科目別履修一覧

作 藤 昌 介 関 係	新 渡 戸 稻 造 関 係
<p><u>1883～84年前期：</u> 歴・政ゼミ (アダムス, 1, 金, 8～10pm), アメリカ史 (アダムス, 1, 木, 12), 国際法 (アダムス, 3, 月火水, 12), 上級経済学 (イリー, 3, 月水金, 4)</p> <p><u>1883～84年後期：</u> 歴・政ゼミ (同上), アメリカ史 (同上), 国際法とヨーロッパ政治論 (アダムス, 3, 月水金, 12), 上級経済学 (同上), 教育学 (オール, 1, 土, 10)</p>	<p><u>1884～85年前期：</u> 歴・政ゼミ (アダムス, 1, 金, 8～10pm), 教会史 (アダムス, 2, 月火, 11), 政治史 (アダムス, 3, 水木金, 10), 貨幣・銀行・財政・商業論 (イリー, 3, 水木金, 12)</p> <p><u>1884～85年後期：</u> 歴・政ゼミ (同上), 政治史 (同上), ルネッサンス論 (アダムス, 2, 月火, 11), 財政・行政論 (イリー, 3, 水木金, 12), 経済学説史 (イリー, 5, 月火水木金, 10), ドイツ語講読 (ヘンベル, 2, 火水または金, 3)</p>
<p><u>1884～85年前期：</u> 歴・政ゼミ (同上), 政治史 (アダムス, 3, 水木金, 10), 貨幣・銀行・財政・商業論 (イリー, 3, 水木金, 12), 国家論 (モリス, 1, 水, 4), ドイツ語作文 (ヘンベル, 1, 木, 11), ドイツ語講読 I (ヘンベル, 2, 月水, 11), ドイツ語講読 II (ヘンベル, ウッド, 1, 金, 11), フランス語会話 (フォンテーネ, 5, 月火水木金, 3), 弁論 (週1回, ウードワース)</p> <p><u>1884～85年前期：</u> 歴・政ゼミ (同上), 政治史 (同上), 財政・行政論 (イリー, 3, 水木金, 12), 教育学 (ホール, 1, 土, 9)</p>	<p><u>1885～86年前期：</u> 歴・政ゼミ (同上), 政治史 (アダムス, 2, 水木, 11), 国際法 (アダムス, 2, 月火, 12), 上級経済学 (イリー, 2, 水木, 10), ドイツ語講読 (ヘンベル, 1, 月, 11), ドイツ語講読 (ゲーベル, 2, 火金, 11)</p> <p><u>1885～86年後期：</u> 歴・政ゼミ (同上), 政治史 (同上), 国際法 (同上), 行政論 (イリー, 1, 金, 10), 上級経済学 (イリー, 3, 火水木, 10), ドイツ語作文 (週2回)</p>
<p><u>1885～86年前期：</u> 歴・政ゼミ (同上), 行政論 (イリー, 1, 金, 10), 上級経済学 (イリー, 2, 水木, 10), ドイツ語会話 (ゲーベル, 5, 月火水木金, 9)</p> <p><u>1885～86年後期：</u> 歴・政ゼミ (同上), 政治史 (アダムス, 2, 水木, 11), 上級経済学 (イリー, 3, 火水木, 10), 行政論 (イリー, 1, 金, 11)</p>	<p><u>1886～87年前期：</u> 歴・政ゼミ (同上), ゲルマン制度論 (アダムス, 2, 水木, 10), 財政論 (イリー, 3, 水木金, 11), 歴史批判論 (ジェームソン, 1, 金, 9), 弁論 (週1回, ウードワース)</p> <p><u>1886～87年後期：</u> 歴・政ゼミ (同上), ゲルマン制度論 (同上), 財政論 (同上), 弁論 (同上)</p>

備考：1) 佐藤昌介関係の履修科目は Johns Hopkins University Circulars. Nos. 27, 29, 34, 38, 44, 47の Enumeration of Classes の諸表から、新渡戸稻造関係の履修科目は Circulars. Nos. 34, 38, 44, 47, 52, 56の諸表から、それぞれ集計した。

2) 上掲表の「歴・政ゼミ (アダムス, 1, 金, 8～10pm)」は「歴史・政治学ゼミナール, 担当教師, アダムス, 週1回, 金曜日, 午後8時から10時まで」を、「国際法 (アダムス, 3, 月水金, 12)」は「国際法, 担当アダムス, 週3回, 月, 火金の12時から1時間」を意味する。他の科目についても同じ。

3) 佐藤が1884～85年前期に履修したモリス教授の「国家論」は哲学科の講義。

3) 本表の科目名は「学報」掲載の年度別学期別「授業計画の科目名」と必ずしも一致していない。

を履修しているが、新渡戸の外国語履修はドイツ語だけであり、それも「会話」のクラスには出席せず、大学院学生に要求される最小限度の「講読 I, II, 作文」の範囲にすぎなかった。

佐藤が大学院の二年目に独佛二か国語の「会話」を履修したのは、かれはこの年、大学院特別研究生 (Fellow by Courtesy) に選ばれ、大学から年額 500 ドルの奨学金を与えられることになっていたから、その大半を学年末の夏休みを利用してのヨーロッパ旅行に充てることを計画していたからである。¹¹⁾

『学報』によれば、英語学科では英語ないしは英文学専攻の大学院学生を対象にして、「現代イギリス文学論」、「エリーザベス朝と18世紀の文学」、「イギリス文学論」など、「文学趣味豊かな新渡戸」(佐藤昌介)の興味をそそるような講義が開講されていたが、それらのどれにも新渡戸が履修したという記録は残っていない。

この時期の新渡戸が英文学を含めて独佛語にも消極的であったのは、日増しに深刻化していたかれの学費問題のなせる業であったが、これについては別の機会にすでに触れているし、¹²⁾ かれの農政学ないしは農業経済学の形成にも直接的な関係をもたないから、ここではこれ以上、追究しないことにする。

(注) 例えば『学報』27号10頁には、佐藤昌介が入学した1883年の10月8日から16日にかけて、フォン・ホルストがヨーロッパ諸国の事例を提示しながら「歴史と政治の関わり」について10回の集中講義をしたことが記載されている。また、佐藤昌介自身も『中央公論』第48巻第12号(1933年12月)掲載の「新渡戸稲造博士を追憶して」のなかで、ジョンズ・ホプキンス大学留学時代に、この種の集中講義によって「時折り獨英の大学者に接する好機会を与へられ、英のゼームス・ブライス氏や獨のフォン・ホルスト氏のごとき史学者に接して…大なる哲発を受けた」といつている。

履修学科目の内容

それでは、佐藤と新渡戸がアメリカ留学中にジョンズ・ホプキンス大学で履修した上記の科目は、どのような教員構成の下で、どのような内容をもちながら講義されていたのであろうか。

佐藤昌介より一年早く、1882年9月にジョンズ・ホプキンス大学哲学科に入学したジョン・デューイは、哲学科に「政治哲学、…社会哲学の講義が欠けているのを補うために、副専攻として歴史と政治学を選び」、歴史・政

治学科の講義・演習にも出席していたが、かれデューイはこの学科をジョンズ・ホプキンス大学における「最大の学科で、学生も最もしっかりしている」²⁾と賞賛していた。

佐藤が入学した年の11月に発行された『学報』第27号によると、「歴史・政治学ゼミナール」と「国際法」の履修学生に、佐藤、ウッドロー・ウイルソン、アルバート・ショーなどとともに、ジョン・デューイの名前が記録されている。

デューイは歴史・政治学科をかれがジョンズ・ホプキンスに在学していた時期の「学内最大の学科で、学生も一番しっかりしている」と賞賛していたけれども、教員構成ではむしろ他の諸学科よりも貧弱で、正教授のポストを欠員にしたまゝ、準教授で学科の先任教師を兼ねていたハーバート・B・アダマス(1850-1901年)、助教授以前のアンシエイトの地位にあったリチャード・T・イリー(1854-1943年)とジョン・F・ジェームソン(1859-1937年)の三人の常勤スタッフによって運営されていた。これら三人の教師のうち、ジェームソンはこの大学で1882年に Ph. D. を取得した学者で、大学院学生を対象とする「歴史・政治学ゼミナール」には、イリーとともに、アダマスの補佐役として顔を出していたが、学士課程の講義だけを担当していた。これに対して、アダマスとイリーは、それぞれ、アムハースト・カレッジとコロンビア大学の学士課程を卒業後、ハイデルベルク大学に留学、アダマスは政治学で、イリーは経済学で Ph. D. を取得した「ドイツ育ちの学者」であった。二人がハイデルベルク大学で学位を取得したときの成績は、どちらも最優等(サマ・カム・ローディ)であったという。⁴⁾しかしそうした事実を認めても、1856年生れの佐藤昌介が、かれよりわずか2-6歳年長の青年教師から社会科学の手ほどきを受けたことには変りない。

歴史・政治学科が正教授を欠いたまま運営されていたのは、この時期の学長ダニエル・C・ギルマンが、かれの再度の就任要請を断った当時のアメリカで最も著名な経済学者フランシス・A・ウォーカーに匹敵する大物を、学外から、歴史・政治学科の教授に招聘する意図をもっていただからである。ウォーカーに代わる候補者として、歴史学者ヘンリー・ブルックス・アダマス、『古代社会』の著者としてわが国でも知られているルイス・H・モルガンなどが挙げられたが、ギルマンが招聘に最も執着したのは、前節で触れたフライバーグ大学の歴史学教授フォン・ホルストであった。ギルマンが1879年5月、ホルストと交渉する際に示した歴史・政治学教授就任条件は年額5,000ドルと

いう、ハーヴァード、エールなどの大学の古参教授を凌ぐものであったが、ホルストはそれには満足せず、1～2年ごとに1回ドイツからジョンズ・ホプキンス大学に出張し、集中講義を実施するにとどまった。ホルストは1892年、シカゴ大学に歴史学科が開設されると同時に、その主任教授に就任したという。⁷⁾ リチャード・イリーが1891年11月、ジョンズ・ホプキンス大学での教授昇任を諦め、ウイスコンシン大学に新設された社会科学関係学部部長 (the Director of New School of Economics, Political Science and History, the Univ. of Wisconsin) として大学の所在地マディソンに赴任したときの条件が年額3,500ドルで、ウイスコンシン大学では学長に次ぐ高給であったというから、²⁰⁾ ギルマンが12年前にホルストをジョンズ・ホプキンスの歴史・政治学教授に招聘するために提示した年額5,000ドルという条件が、いかに並外れたものであったかを知ることができるであろう。

かくして、学長ギルマンの再三の努力にもかかわらず、ジョンズ・ホプキンス大学の歴史・政治学科は教授を欠員にしたまま、1880年代を送るのであるが、このことはこの学科の大学院の講義・演習の担当者であったハーバート・B・アダムスとリチャード・T・イリーの二人にとっては、かれらの溢れるばかりの若々しいエネルギーによって学科運営ができるということで、むしろはっきりと、好結果をもたらしていた。

教授を欠いたまま、イリーとジェームソンを補佐役としながら、アダムス主催の下に、年間前後期を通して週一回、金曜日の夕方8時から10時までの2時間、学科のブルンチュリ・ライブラリー (Bluntschli Library) で実施された「歴史・政治学ゼミナール」は、年ごとに名声を高め、佐藤と新渡戸を留学していた1885年前後には、すでにその存在を国の内外に広く知られるまでになっていたが、アダムスとイリーは、かなり違った性格の持ち主であったことが伝えられている。この点をヒュー・ホーキングズ『パイオーニア：ジョンズ・ホプキンス大学の歴史』によって描写すると、次のようになる。

「そのうちの一人は溢れんばかりの野心の持ち主であったが、あらゆる苦難に辛抱強く耐え抜く学究者 (ambitious and tenacious fellow) であり、もう一人はこれとは正反対の、衝動的で遠慮会釈ない発言と論争を好む青年学者で、非正統的な著作を発表して学界の内外に物議を醸したが、大学がかくまった人物」⁸⁾ 前者はアダムスを意味し、後の一人はイリーであるが、より詳しい説明は別の機会に述べることにして、『学報』第31号 (1884年6月刊) に収録されている1884年9月か

らの「歴史・政治学科授業計画」によって、新渡戸が大学院に入学した1884-85年度の講義・演習の概要について説明してみることにする。³⁾

歴史・政治学ゼミナール：

受講資格者は大学院学生。ゼミナールの主宰にはアダマス博士が当り、イリー、ジェームソン両博士の補佐のもとに毎週金曜日、午後8時から2時間実施する。試験は上記三名の教師に加えて、ゼミナールに招待される講師が、質問と筆記の形式で、適時、実施される。来年度のゼミナールは、歴史・政治学科所属の三人の教師と報告を義務づけられる学生諸君とが協力、主として、次の三分野の研究を進める。

1. 郡部 (カウンティ)、都市、出身国のタイプに留意しながら、アメリカの行政組織の特徴を明らかにする。来年度の狙いは、過去数年にわたる研究成果を一段と高めることである。指導はアダマス博士。

2. アメリカ経済学の歴史を (ヨーロッパ諸国における — 引用者) 経済学的发展史、アメリカの租税制度・経済組織の歴史と関連させながら、オリジナルな方法で研究する。この分野の指導はイリー博士。

3. 1～2の代表的な州を選定し、それらの州の憲法を、歴史との関連において、特徴づける。ジェームソン博士が指導に当る。

政治史：

担当はアダマス博士。受講は大学院学生と法律専攻の学士課程学生。講義は今世紀初頭以後のヨーロッパ諸国の比較政治史、古代ヨーロッパにおける社会制度、一般政治史に関する2～3の見解などを含む。講義は前後期を通じて週3回。

この講義を履修する学生諸君は、プラトン『共和国』、アリストテレス『政治学』、マキャヴェリ、モンテスキの著作、ブルンチュリ『新編国家学史』、『近代国家学説』などの読書が要求される。

講義は、必要に応じて、学外から招待する権威者を含めて実施されるが、これについては後日、揭示する。

財政・金融論：

担当はイリー博士。法律専攻の学生諸君の出席を配慮して実施される。財政、貨幣、銀行業の一般原理を講述し、合衆国の財政史の概要に触れながら、州、都市の租税に係わる特有の諸問題について論及する。前後を通じて週3回。

初期キリスト教教会論：

担当はJ. レンダール・ハリス (J. Rendel Harris) 準教授。講義は6回。原始教会の性格、組織、慈善事

業、その他の諸制度について講述する。

* * *

以上は新渡戸が入学した年の大学院レベルにおける主要科目の講義・演習の概要であるが、これよりも一年早い、佐藤が入学した年の授業計画を『学報』第24号(1883年6月刊)を用いて紹介すると、次のようになる。ただし、上記と重複する科目の紹介は除外する。

アメリカ植民史関係文献論：

担当はアダムス博士。前期週1回、メリーランド州歴史協会図書館で実施。以下略……

アメリカ憲法史関係文献論：

担当はアダムス博士。後期週1回、メリーランド州歴史協会図書館で実施。このコースの目的はアメリカ憲法の起源と発展とに関連させながら、アメリカ史に関する基本的文献の利用に習熟させることである。以下略……

上級経済学：

担当はイリー博士。前後期を通して週3回。前期は関税、協同組合、ストライキ、移民などの実際問題と関連づけながら、経済学の諸原理を講述。後期は18～19世紀における欧米の社会運動について論及する。

イギリス社会主義論：

担当はイリー博士。19世紀のイギリスにおける社会運動について講述し、ロバート・オーエン、イギリスの共産主義、穀物法反対運動、チャーチズム、キリスト教社会主義などにとくに論及する。

* * *

以上が佐藤昌介と新渡戸稲造のジョンズ・ホプキンス大学歴史・政治学科入学当時の大学院の授業内容であるが、これらを検討すると、アダムスとイリーについてこれまでわが国で説明されてきたことと、かなりの相違があることに気付くであろう。まず、ジョンズ・ホプキンス大学におけるイリーの地位についてである。岩波版の『経済学辞典』(1928年)や『西洋人名辞典』(1981年)によれば、イリーはコロンビア大学卒業後、「ドイツの大学で学び……ハイデルベルグ大学でクニース教授の薫陶を受けて1879年 Ph. D. の称号を得た。80年帰国、翌年ジョンズ・ホプキンス大学に聘せられてウォーカー教授の後を継ぎ、85年その教授となる。92年ウイスコンシン大学教授に転ず」²⁵⁾ (傍点は引用者)。また、イリーの研究者でもあった小原敬士の「リチャード・イリー」(『社会経済史学』第16巻第2号収録)には、「イリーは1881年以来、ジョンズ・ホプキンス大学に就職していた。ドイツから帰りたてのイリーはニューヨークで職を求め

ていたが、……ジョンズ・ホプキンス大学の教授に迎えられた。……イリーは年俸1,200ドルでこの大学に招かれ、その後11年間そこにいたが、この時期こそ、かれの学問的生涯の中の黄金時代であった」(傍点は引用者)という種類の説明が見られる。しかし、以上の説明は「ジョンズ・ホプキンス大学時代こそ、かれの学問的生涯の黄金時代であった」という箇所を除くと、どちらも大学内におけるイリーの地位について誤って報導している。ドイツに留学して Ph. D. を取得したといっても、帰国時まだ27歳にすぎなかった無名のイリーが、豊富な基金をもち、有名教授に高額な年俸を支払うことで、自選他選の多くの候補者を退けて、一挙に教授として採用されたとは考えられないし、「衝動的で遠慮会釈なく、友人の迷惑も考えずに発言する、論争好き」(ホーキングズ)なかれが、学内での昇任に人一倍神経を使いながら、しかも自己の主張を貫くために、心身を磨り減して苦闘する姿²¹⁾は、こうした説明からは浮んでこない。

ベンジャミン・レーダーの〈イリー研究〉によれば、1881年、イリーがジョンズ・ホプキンスに就職したときの身分は半年契約のインストラクターで、教師としては大学内で最低の地位であった。半年契約を延長できて、かれがアソシエイトに昇任したのは、翌1882年の秋。アソシエイトからアソシエイト・プロフェッサーへ昇任したのは、1886年5月末。この年の7月に佐藤昌介は大学院の課程を終了、Ph. D. を取得して帰国するから、佐藤は教授や準教授としてのイリーではなく、日本の大学でいうと講師の地位にあったイリーから、経済学を学んだことになる。

ドイツ留学中に知り合った、ベルリン駐在のアメリカ公使、アンドリュー・ホワイトの紹介で、大学側から招聘されたというよりも、むしろホワイトがギルマン学長に頼み込んで1881年にジョンズ・ホプキンス大学のインストラクターになったイリーも、佐藤が大学院生活の最後の年を過ぎていた、5年後の1886年には、大学の地位はアソシエイトに過ぎなかったが、アメリカの経済学会では最も知名度の高い学者に成長していた。

1881年から86年にかけてイリーは『現代佛独社会主義論』、『経済学の過去と現在』、『アメリカ労働運動論』を含む数多くの論文を発表しており、闘志溢れる教師として、学生たちのなかで最も多くの追随者をもつ、ジョンズ・ホプキンス大学の人気教師になっていた。以上の三つの著書のうち、『現代佛独社会主義論』は『近世社会主義論』(初版1897年、再版1919年再版)として、『経済学の過去と現在』は『新旧両派経済学』(1888年)として、それぞれ河上清と嵯峨根不二郎によって邦訳されたことは、別

の機会に触れたとおりである。とくに『現代佛独社会主義論』は河上清の翻訳書が出版される以前に、植村正久が1891年(明治24年)4月から6月にかけて6回にわたって「エライ氏の近世社会主義」としてかれの個人雑誌『日本評論』において紹介したのが切っ掛けとなって、社会問題に関心をもつ青年層のなかに多くの読者を獲得したことは、堺利彦や大内兵衛の説明によって明らかである。¹⁹⁾

ところで、イリーのこうした面は、ジョンズ・ホプキンス大学で直接かれから講義を聞いた新渡戸稲造によって、次のように紹介されている。「マルクスの話を私が初めて聞いたのは……ジョンズ・ホプキンス大学のイリー先生からであった。その頃、……イリーという人はアメリカの社会問題、ことに社会思想、社会主義の最高のオーソリティであった。そこで、私のいた大学ではイリー先生の講義が毎年あって、その題は社会主義論というのであった」¹⁶⁾

新渡戸がイリーを紹介するに際して「アメリカの社会問題、ことに社会思想、社会主義の最高のオーソリティ」という表現を用い、「経済学者として最高のオーソリティ」という言葉を使っていないことに注意する必要がある。アメリカ留学時代の新渡戸は、佐藤昌介と大学院で同期であったウイルソンに傾倒し、ウイルソンを通してエドモンド・パークやバジョットの学説に強く引かれるようになっていたから、ウイルソンがイリーの経済学の講義を、「獨創性に欠け、シェンパークの経済学便覧(Shönberg's Hundbuch)をバイブルとして行われている」⁵⁾と批判していたことを知っていたのであろうか。

イリーの経済学は、ウイルソンが批判したように、かれの知名度に較べると、獨創性に欠けている。さきに挙げた『経済学の過去と現在』はイギリス古典経済学とその亜流であるマンチェスター学派を、論争形式で、完膚なきまで批判するという性質のものであったが、批判の拠りどころは、かれがドイツ留学中に学んだ新歴史学派の理論やエミール・ド・ラヴェレー、クリフ・レズリー、イングラムなどの見解を、そのまま引用して説明しているにすぎなかった。

限界生産力説によって獨創的な理論を展開したジョン・ベーツ・クラークなどと異なり、賃金、地代、利子論など経済学の諸分野でかれ自身の理論をもたなかったイリーが、講義に出席した学生やかれの著作に接した多くの読者に深い感銘を与えたのは、どのような理由によってであろうか。この問題に答えるのは容易なことではないが、一応、次のように要約できるであろう。

1. イリーの講義や論文は、論争形式によりながら、「社会正義の名の下に、古典経済学とそれにつながる学者たちを一刀両断に切り倒す」¹⁸⁾ という、青年好みの特徴をもって展開されていたということ。

2. 古典経済学の〈自由放任〉の原則を当時の流行であった〈社会進化論〉の思想と結びつけ、それらを「非特権階級の擁護」という形で、「キリスト教理想主義の視点から痛烈に批判した」²²⁾ ということ。

これら二つの特徴をもつイリーの講義・論文が、学生たちにいかに強い感銘を与えたかを知るため、学生時代に聴講したイリーの講義について、次のような感想をかれ宛に書き送ったフレデリック・C・ハウ(Frederic C. Howe)の回想録を引用しておく。ハウはジョンズ・ホプキンス在職時代のイリーの門下生の一人であり、フランクリン・ルーズベルトの顧問として1930年代のニューディール政策の立役者となった人物である。²²⁾

「……わたしたち門下生は皆、先生に次のことを感謝しています。それは、先生が講義において、過去の経済学を構成していた、地代、利子、賃金、価値の理論などよりももっと重要な問題について、すなわち人間は(古典経済学の教える — 引用者注)単なる強欲な存在を超えたものであるということ、わたしたちに明らかにされたことであります。経済学は社会的存在である人間を取り扱う学問でありますから、先生の教えは当然なことではありますが、わたしたちが先生から学んだのは数本の木についてではなく、正に森全体についてでありました。……」(ハウからイリーへの1894年8月1日付の手紙)

イリーのこうした性格に共鳴してジョンズ・ホプキンス大学に学んだ学者として、アメリカ人では社会学者として大成するアルビアン・スモールと制度派経済学の創設者ジョン・R・コモズを、日本人では家永豊吉を挙げることができる。¹⁾

佐藤昌介と新渡戸稲造の場合はどのようであったであろうか。

新渡戸の場合は、さきに触れたごとく、ウイルソンの影響が色濃くでているが、佐藤の場合は、かれが帰国後の数年間に執筆したものに關するかぎり、イリーの影響がかなり鮮明に現われている。例えば次の引用は、イリーの『経済学入門』(1889年)を『威氏経済学』として、丸善商社から翻訳出版する許可を得るために、佐藤が書き送った手紙の一節である。²²⁾ 「御著書は正にわたしたちが日本で必要としている類のものであり、この国に極めて有用であることについては、疑う余地はありません。日本国民(the Japanese public)は、現下の

重要な経済問題が、マンチェスター学派流に、無味乾燥に説明されることに聞き飽きています(1890年1月7日付)。佐藤にとってイリーの経済学は「従来のものとは大いにその面目を異にする……世の所謂新学派に属する」もので、「実事(ママ)問題に関する議論は最も活潑、最も剴切にして、従来の経済学者が度外(に)放置して顧みざるものとは、日を同じうして語る可らず。氏は米国近代の経済学者中そうそうたる人物にして、……経済問題、社会問題の研究において、つとに米国外に宣伝せり……」²⁴⁾

これらは翻訳書の序文やかれ宛の手紙に書かれた佐藤の<イリー札替>であるから、多少割引して読む必要があるが、ジョンズ・ホプキンス大学の入学に際して、特別奨学生たらんとして、入学直前に「自由貿易論」¹⁵⁾を大学側に投稿していた佐藤が、歴史・政治学科で三か年の留学生を送るうちに、イリーを中心とする新経済学に共鳴する、保護主義者に変貌したことを示すものである。

佐藤『大農論』展開の基礎

鳥居清治訳注の『新渡戸稲造の手紙』には、新渡戸がボルティモアに滞在中、宮部金吾に送った1885年11月13日付の原文と訳文が収録されている。次の引用は、この手紙の一節である。²⁷⁾「……大学院でのゼミナールに出席したり、あれやこれやの講義から強い影響を受けるとき、僕は次のように自問する。<札幌にもこうした学校を作れないであろうか>と。今年の正規の授業はローマ社会制度論週2時間、経済学2時間、行政論1時間、国際法2時間、ドイツ語2時間。これらのほかに、土地問題(アグラリアン・エコノミー：農政)の研究に多くの時間を当てている。どの科目にも増して、アグラリアン・エコノミーに重きをおき、それにより多くの時間を費やしているというのが、僕の今日のごろです」(訳文は引用者)。

さて、われわれが前節で検討したように、佐藤・新渡戸留学時代のジョンズ・ホプキンス大学には、農業経済学や農政学の講義は行われていなかった。この事実は新渡戸が<アグラリアン・エコノミー>に、とくに<農政>という訳語を用いても同じであるし、しばしば触れたごとく、新渡戸自身が明らかにしているところである。

それでは、新渡戸はどのようにしてアグラリアン・エコノミーの中心である土地問題の研究に取り組んでいたのだろうか。新渡戸が上記の手紙を書いた1885年11月は、新渡戸にとってはジョンズ・ホプキンス大学での二年目の年であり、佐藤昌介にとっては三年目の、正に、留学最終の学年に相当していた。

まず、この間の事情を明らかにするために、歴史・政治学ゼミナールでどのような研究が取り上げていたかについて検討してみることにする。

R・ホフスタッター『アメリカの政治的伝統』の第10章「ウッドロウ・ウイルソン — リベラリストとしての保守主義者」には、ウイルソンがジョンズ・ホプキンス大学の歴史・政治学科の大学院に在学していた時期に、主として次のような課題がゼミナールで取り上げられていたことを伝えている。すなわち、「タウン・ミーティング、地方組織体、土地制度の発展を跡づける制度史」⁹⁾などであった。

佐藤とウイルソンは大学院に入学した年も、Ph. D. を取得した年も同じであったから、ホフスタッターの上記の指摘は、新渡戸の宮部宛の手紙の背影を知るにも、極めて有益である。

1926年8月に発行された『学報』第373号は、全頁を『博士論文課題一覧、1876—1926年』(Doctors' Dissertations, 1976—1926")に当てている。この『一覧』によれば、歴史・政治学で、新渡戸が在学していた1887年までに、Ph. D. を取得した人の数は全部で15名。学位論文第1号は1878年に提出されたヘンリー・カーター・アダムの「合衆国における租税、1789—1816年」。論文第2号は、佐藤・新渡戸の在学中に学士課程のアソシエートであった、ジョン・F・ジェームソンの「ニューヨーク市政府の起源と発展」であり、これらがそれぞれ1878年と1882年に提出されたのに続いて、1884年には3名、1885年には1名、1886年には佐藤とウイルソンを含めて7名、新渡戸の最終学年に当たる1887年には2名が、提出している。以上15名の学位論文のうち、ジョン・デューイの兄、デヴィス・デューイの「ヘンリー・C・ケアリ以前のアメリカ経済学の歴史」、佐藤の「アメリカ合衆国における土地問題の歴史」(History of the Land Question in the United States)、ウイルソン「議会政府論 — アメリカ政治の研究」の三つを除くと、他の論文は全て、ホフスタッターの指摘のごとく、地方行政組織やそれを支える租税制度の発展史を取り扱ったものであった。

しかし、ここでとくに指摘しなければならないのは、これらの学位論文が書かれたときの、ジョンズ・ホプキンス大学の学問的雰囲気についてである。この大学では当時すでに「学生をたんに講義を受け入れる容器として取り扱うというふん囲気全くなく、……自分の力で真理を発見する探究者であると考え」という気風が確立していたから、教師の役割も、「学生たちに真理探究の手段と方法について適切な励ましや助言を与える」ことであ

ると理解されていたことである。³⁾

佐藤にとってもこうした雰囲気は例外ではなかった。かれは「北海道庁の囑託を受けて在学していたから、その選ぶ問題は」、新渡戸の表現を借りるならば、米国公有地の処分問題¹⁷⁾を中心とする「合衆国における土地問題の歴史」で、地方行政組織の発展史を課題としていた他の大学院学生と違った領域の問題に取り組みなければならなかったから、学位論文を完成するためには他の学生以上に、かれ自身の独創性が必要であった。本論181頁、『ジョンズ・ホプキンス大学歴史・政治学叢書』第4巻第7～9巻(1886年7～9月刊)に収録されている佐藤の学位論文の扉には「歴史は過去の歴史であり、政治は現代の歴史である (History is past politics and politics present history.)」というイギリスの歴史家エドワード・A・フリーマン(1823-1892年)の言葉が印刷されている。

佐藤の学位論文の内容については他の章で触れているので、ここではかれが論文の序言で、19世紀の80年代に「アメリカ議会が土地問題を最重要の審議事項として論議するようになったのは、労働団体、とくに労働騎士団の土地改革要求に根ざす」ものであり、「破廉知な土地横領者が公有地を掠め取ることを可能にした農業行政 (agrarian administration) の悪弊」を改めない限り、労働団体の土地制度改革綱領を急進的だと批判しても、決して世論を動かすことにはならないし、「アメリカの土地改革問題はホームステッド法が唯一の土地開拓のための法律となり、横領された公有地が政府に返環され、実際の開拓者に配分される日がくるまで進展していく、と考えている」と書いていることだけを挙げておくことにする。

佐藤のこうした土地問題の取り上げ方が、農学校出身で、かねてから農政学の研究を志していた新渡戸の強い関心を引いたことは、十分あり得ることである。新渡戸がアダマスから与えられた課題は、「日米修交史」の研究であったけれども、佐藤の研究は農政学研究に対する新渡戸の郷愁を喚起し、かれを、上述の宮部宛の手紙に書かれているような状態に、導いていたのであった。

そして、佐藤がアメリカの土地問題をこうした歴史家としての視点から捉えていたことを認識することは、帰国後のかれの、農業経済学、とくに〈大農論〉を檢当討するときに、重要な意味をもつ。学者としての佐藤は、残念なことに、学位論文「合衆国における土地問題の歴史」の著者としてよりも、わが国では『農学会会報』第3号(1888年11月刊)に発行された「大農論」によって知られている。

しかし、佐藤の「大農論」は決して大農の創出や優越

を論じたものでないことは、一読すれば、明らかである。かれは「大農論」という題名で論文を書いたことで、大農論者のようにいわれてきたが、社会福音運動の推進者であったイリーから経済学の手ほどきを受けたかれが、小・中農の犠牲を前提とする大農優越論を展開するはずはなかったし、論旨もそのように構成されていない。

佐藤の大・中・小農論は、かれがジョンズ・ホプキンス大学留学中に愛読してやまなかった J. W. プロウビン編『諸国における農地制度』(J. W. Probyn, Ed.: "Systems of Land Tenure in Various Countries." Cassell, 1870) に収録されているクリップ・レズリーやエミール・ラヴェレーの論文の検討と併行して、別稿で改めて追究されなければならない。

追記：本稿は昭和57年度文部省科学研究補助金一般研究Cによる「札幌農学校初期における農業経済学の形成過程に関する研究」の研究成果の一部を成すものである。

文 献

- 1) Commons, John R.: *Myself*. Univ. of Wisc. 40-41 (1964)
- 2) ダイキューゼン, G. (三浦典郎・石田 理訳): ジョン・デューイの生涯と思想, 清水弘文堂, 東京 (1977), pp. 63.
- 3) ダイキューゼン, G.: 上 掲邦訳書. p. 62.
- 4) Doren, Charles V., ed.: *Webster's American Biography*. G & C. Merrin Co., 8-7 (1975); Rader, Benjamin G.: *The Academic Mind and Reform*. Univ. of Ken. Pr., 13 (1966)
- 5) Ely, Richard T.: *Ground Under Our Feet - An Autobiography*. Arno Pr., New York. 111 (1977)
- 6) Hawkins, Hugh: *Pioneer - A History of the Johns Hopkins University, 1874-1889*. Cornell Univ. Pr., 8-11 (1960)
- 7) Hawkins, H.: *Ibid.*, 170-171.
- 8) Hawkins, H.: *Ibid.*, 169.
- 9) ホーフスタッター, R. (田口富久治・泉 昌一訳): アメリカの政治的伝統 II - その形成者たち. 岩波書店. 東京 (1960), pp. 114.
- 10) 北海タイムス社編: 北大百年の百人. 北海タイムス社, 札幌 (1976), pp. 12.
- 11) 和泉庫四郎: 佐藤昌介の米國通信と原敬. 北海道新聞, 1982年2月18日夕刊の文化欄.

- 12) 和泉庫四郎：米留学時代の新渡戸稲造。読売新聞，1982年6月2日夕刊の文化欄。
- 13) *Johns Hopkins University Circulars, No. 37.* Johns Hopkins Univ., Baltimore, 114-115 (Sept. 1884)
- 14) 松隈俊子：新渡戸稲造。みすず書房，東京（1982）pp. 140.
- 15) 中島九郎：佐藤昌介。川崎書店新社，札幌（1956），pp. 51-52.
- 16) 新渡戸稲造：全集第6巻。教文館，東京（1964），pp. 235.
- 17) 新渡戸稲造：学生時代のウイルソン。中央公論，大正6年3月号収録（1917）
- 18) Noble David W. : *The Paradox of Progressive Thought.* Univ. of Minn. Pr.. See Chapt. 7, esp. pp. 160 (1958)
- 19) 大内兵衛：経済学五十年。東大出版会，東京（1967），pp. 25.
- 20) Rader, Benjamin G. : *The Academic Mind and Reform - The Influence of Richard T. Ely in American Life,* Univ. of Ken. Pr., 170-171 (1966)
- 21) Rader, B. G. : *Ibid.*, 55-82.
- 22) Rader, B. G. : *Ibid.*, 22.
- 23) 佐藤昌介：新渡戸稲造博士を追憶して。中央公論，昭和8年12月号収録（1933）
- 24) 佐藤昌介：威氏経済学。九善書籍，東京（1891）収録の佐藤の訳序文 pp. 1-2 による。
- 25) 西洋人名辞典（増補版）。岩波書店，東京（1981），pp. 140.
- 26) 高岡熊雄：時計台の鐘。楡書房，札幌（1956），pp. 31.
- 27) 鳥居清治：新渡戸稲造の手紙。北大図書刊行会，札幌（1976），英文の部 pp. 24.